

上智大で全学部日程の「TEAP 利用型入試」を導入！ 新開発の英語能力試験を利用、複数学科の同時併願が可能に

旺文社 教育情報センター 25 年 11 月

平成 27 年（2015 年）から、いわゆる「新課程入試」がスタートする。まずは、センター試験（以下、セ試）や各大学の個別試験の数学・理科が、他教科に先がけて大きく様変わりする。各大学とも、こうした新課程の教科・科目への切り替えに注力しているが、実はその他にも、大きな変更がいくつか発表されている。

おもな私立大では、南山大の理工学部のキャンパス移転（愛知県瀬戸市→名古屋市）、立命館大の京都・大阪間のキャンパス新設（経営・政策科学の 2 学部が移転予定）、龍谷大の国際関係学部のキャンパス移転（滋賀県大津市→京都市）と「農学部」新設などが注目されるが、首都圏で最も目立つのは、上智大の導入する全学部統一日程「TEAP 利用型入試」だ。

国際教養学部を除く 8 学部（26 年増設予定の総合グローバル学部を含む）が、27 年一般入試日程の初日（2 月 3 日）に統一試験を行う。同入試最大の特徴は、英語の試験を実施せず、「アカデミック英語能力判定試験（TEAP）」という英語能力試験のスコアを利用する点だ。TEAP の受験が必須であり、出願時に提出するスコアが学科ごとに設定する基準点をクリアすることが出願資格となる。ただし、基準点以上ならスコアの高低は合否に影響しない。また、従来型の一般入試との併願は可能だ。TEAP 以外の、現時点（11 月現在）で公表されている、試験当日における各学部の試験科目は次の通り。

①神・文・総合人間科学・法・経済・外国語・総合グローバル

国語＝国語総合・現代文・古典の中から各学科指定の範囲（60 分／100 点）

地歴・公民・数学＝日本史 B・世界史 B・地理 B・倫理・「政治・経済」・「数 I・II・A・B」から
1 科目選択（60 分／100 点：学科により科目指定あり）

②理工

数学＝「数 I・II・III・A・B」（90 分／150 点）

理科＝「物理基礎・発展」・「化学基礎・発展」・「生物基礎・発展」から 2 科目選択（90 分／150 点：試験日当日に選択可）

理工では同一試験で全 3 学科に同時併願できる。また、理工以外の 7 学部でも、学科指定の選択科目が同じ場合、複数学科に同時併願できる。さらに、試験当日は午前中に理工以外の 7 学部、午後に理工の試験を実施するため、双方の併願も可能だ。

●TEAP とは？

TEAP（Test of English for Academic Purposes）とは、上智大と日本英語検定協会（英

検)が共同開発した、大学で学習・研究を行う際に必要とされる、アカデミックな場面での総合的な英語運用力(英語で資料や文献を読む、講義を受ける、意見を述べる、文章を書く、など)を測定するテスト。「読む」「聞く」「話す」「書く」の4技能で構成され、難易度は「英検準2級～準1級」程度とされる。26年は、年3回(7月・9月・12月)、全国7都市(札幌・仙台・東京・名古屋・大阪・広島・福岡)で実施される予定で、複数回の受験が可能。なお、初年度は7月が「リーディング、リスニング」のみ実施、9月から「ライティング」、12月からは「スピーキング」も実施される(ライティングとスピーキングは一部地域でのみ実施予定)。

これまで上智大では、セ試利用入試を実施せず、学外試験会場も設けてこなかった。このため、TEAPの試験会場が、実質的に同校初の学外試験会場として機能することにもなる。同校ではすでに公募推薦の出願資格と、「カトリック高校対象特別入試」の選抜方法の一部としてTEAPを利用しており、その実績を踏まえての、一般入試への導入となる。27年入試では全学部とも「リーディング・ライティング」のみ利用するが、28年入試以降、4技能全てを課すか、一部を課すかは、学部・学科の特性やアドミッション・ポリシーにより異なるという。

●大学入試における英語検定利用に“拍車”?

この「TEAP利用型入試」に留まらず、外部の検定試験で入試の一部を代替するスタイルは、実は静かな“トレンド”となっている。“グローバル人材”育成の観点から、中教審の答申で英語について外部試験の活用を促す旨が盛り込まれたのを受け、一部の入試方式で、入試科目のうち、英語をセ試や大学独自の試験から、外部の検定試験で代替するケースが散見される。

例えば、14年新設予定の長崎大-多文化社会では、出願時に学部指定(英検準1級以上など)の英語検定のスコアを提出した場合は、セ試の外国語を満点として採点する。さらに15年では、国際基督教大が一般入試をA・B方式に分割、新規実施のB方式(募集10人)の選抜方法(1次=総合教養・英語、2次=面接)のうち、英語は外部試験(IELTSまたはTOEFL)を利用。立教大-異文化コミュニケーションの自己推薦「自由選抜入試」でも、外国語の筆記試験を廃止し、英語検定(英検・TOEFL・TOEIC)のスコア提出を志願者全員必須とする。

政府の教育再生実行会議において、セ試の「達成度テスト(仮称)」への転換までが提言される中、出願資格や代替試験の選択肢として大学入試における外部の各種検定試験、とくに英語についての利用には、ますます拍車がかかるものとみられる。

ちなみに、TEAPを利用した新たな入試制度の検討に関連する情報交換や、高大接続を意識した英語教育改革の検討・情報発信を目的として発足した「TEAP連絡協議会」には、25年11月現在、上智大をはじめ、筑波大・群馬大・青山学院大・成蹊大・聖心女子大・中央大・東海大・明治学院大・立教大・南山大・関西大・甲南大・神戸女学院大など、国公立あわせて55大学が参加している。同協議会への参加は、TEAPの利用が前提となっているわけではないが、各大学の関心の高さを物語る。

【参考】TEAPの詳細情報については、下記のサイトを参照されたい。

<http://www.eiken.or.jp/teap/>